

短期講座

91.海外から見た日本文化を学ぶ講座

講義の目的	コロナが一段落し、街を歩くと海外の方の多さに驚きます。外国人の人気NO1は大阪城です。彼らは日本をどう思っているのでしょうか。我々は海外の方に日本文化をどの位説明出来るでしょうか。我々が知らない日本文化の不思議さ、良さを専門的に研究されている海外の研究者の方から学ぶことで眼から鱗が落ちます。
-------	--

開校日：水曜日 時間：14:00～16:00 会場：大阪歴史博物館

	月	日	テーマ	概要	講師
1	4	10	「日本のアニメや漫画の コスプレ文化」	1950年代から日本では、サイエンス・フィクションのファンクラブが誕生した。このクラブの活動によって、空想科学の愛好家だけでなく、アマチュアの作家なども交流し、さまざまな趣味の人々が集まり、日本全国や米国まで広がるネットワークが形成された。その土台において、70年代にはアニメや漫画の愛好家サークル、アマチュア漫画家や作家の同人雑誌の即売会などが生まれた。80年代には、漫画やアニメのキャラクターに扮装する「コスプレ」という遊びが誕生し、現在でも続いている。本講座において、コスプレと空想科学の関係、さらにはアマチュア漫画や小説の活動との関わりについて、コスプレ活動の歴史と現在の状況の調査から紹介する。	関西学院大学語学教育研究センター非常勤講師 アルバロ・ダビド・エルナンデス・エルナンデス
2	4	24	「方丈記」	本講義では、日本の古典文学である『方丈記』がいかにして海外に紹介され、どのように日本とは別の形で海外で読まれたのか、具体例を提示しながらみみていきたい。	龍谷大学世界仏教文化研究センター 博士研究員 ブラダン・ゴウランカ・チャラン
3	5	8	「南方熊楠」	本講義では、博覧強記として知られる南方熊楠の国際的な活動に触れつつ、彼の『方丈記』共訳を事例に、熊楠が『方丈記』をどのように理解し、そしてどのように海外に紹介しようとしたのかについて紹介する予定である。	龍谷大学世界仏教文化研究センター 博士研究員 ブラダン・ゴウランカ・チャラン
4	5	22	「宣教師が見た日本の自然環境と人間」	16世紀半ばにイベリア半島の商人と宣教師は長い旅をして日本に寄港するようになった。周知の通り、彼らがもたらした技術・信仰・知識・食文化・衣装などは日本社会へ様々な影響を与えた。また、彼らが残した手紙や報告の中に当時の日本の生活習慣・宗教・政治事情などについて詳細に書かれており、貴重な史料となっている。一方、彼らは日本における自然的条件や環境と人間との関わりがヨーロッパのものとは非常に異なり驚いた。本報告では宣教師たちの記述に基づき、日本の自然とその生態系における人間の位置に関して彼らが理解・把握した内容について紹介する。	同志社大学グローバル地域文化学 部助教 ペレス・リオボ・アンドレス
5	6	5	「日本哲学と台湾哲学」	本講座は、台湾植民地時期における哲学の受容を踏まえて、京都学派の哲学は台湾においてどのように議論され展開されていったのかを中心に話を進めていきます。	国際日本文化センター外国人来訪 研究員(中山大學哲学系教授) 廖 欽彬
6	6	12	「日本文化における「縁起」概念――日常から哲学へ」	日本語では、「縁起」という言葉は日常的に用いられている。例えば、「縁起が良い」「縁起物」などのような表現がいくつかある。「縁起」という語は日本文化の構造とその歴史に深く関連している。インド仏教に由来する「縁起」概念は、もともと「因果」または「運」と微妙に違うアイデアであった。またこの概念は、現代日本哲学の重要な概念の一つであり、殊に於いて西田幾多郎の弟子であった山内得立(1890-1982)の『ロゴスとレンマ』(1974年)では、主要概念の一つであると言える。本講義では、「縁起」という語の日常的用法、「縁起」概念の歴史(特にpratityasamutpādaというサンスクリット語の意味とその漢訳)、そして山内哲学における解釈を検討し、この概念の現在意義について論じる。	京都大学人文科学研究所連携研究者(フランスの国威哲学コレージュのプログラムディレクター)ロマリク・ジャネル
7	7	24	「白黒の色彩からみる日本文化―韓国文化との比較の視点から―」	東アジアの陰陽五行説に基づき、白黒という色彩の意味合いから日本文化の有り様を述べるが、日本文化の特徴を鮮明にするため韓国との比較の視点から追究する。一般的に日本社会は物事に対するはっきりとした意見を表さない曖昧さが目立つ文化であると言われるが、そのことの詳細を明確にする。	甲南大学 全学共通教育センター 教授 金泰虎
8	7	31	「日本の独特な食事作法―日韓の食具が果たす役割を中心に―」	日本社会は茶碗とお椀を手にとって食事をするユニークな食事作法を有している。一方、韓国をはじめとする多くの国では食器を手にとって食事をする習慣はあまり見られない。この日本の食事作法の形成に、いかなる要因が関わっているのかを追究するが、日本と韓国の歴史にみる食具の使い方を調べ作法の形成を明らかにする。	甲南大学 全学共通教育センター 教授 金泰虎